

風色の望郷歌



伊藤信吉

伊藤信吉

朝日新聞社

望郷歌の風色



風色の望郷歌

一九八四年五月二十日第一刷発行

著者 伊藤 信吉

発行者 初山 有恒

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五十三一二

電話 〇三―五四五―〇一三二(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京 〇一―七三〇

印刷所 共同印刷株式会社

定価 一四〇〇円

目次

		入り口	
		村の三本辻の信号機	5
1月	10	風々吹くな 西の山が燃えるぞ	
2月	29	弁当は何だい 焼餅かい	
3月	49	粟三升貸した、粟三升貸した	
4月	66	憂きことあるとき共に憂い…	
5月	86	上州は桑原十里桑の実の赤きを…	
6月	104	婦命頂礼 蚕影さま 蚕の由来を…	
7月	123	土用半ばに秋風が吹く	
8月	142	ちよいと出ました三角野郎が	

9月

158

電灯が呼吸をつく

10月

176

死なば十月、中十日

11月

192

額で胡麻を炒るような日だ

12月

211

おらあ 檻樓ずーるずる

13月

230

唐土の鳥が渡らぬ先に

245

覚え書き

村の三本辻の信号機

入り口

空っ風が名物だといわれる上州。その上州を故郷とする私の生まれは明治三十九年（一九〇六）の午^{うま}年。馬ではあっても、私の足どりは驢馬ののろ足だった。女の人ならばこの年は丙午^{ひのえうま}で、亭主を殺すというひどい迷信がある。難儀したろう女たち。それにくらべれば驢馬はまだしもだが、すでに私は馬齢七十八である。

年寄りは愚^ぐにかえる。この場合の愚は、つまりは退化人間になって、単純思考の子供に戻ることだ。愚の一つに郷愁がある。村へ帰っても知人の多くが消えてしまったし、民家も村通りも川も田畑もすっかり変わってしまったし、われから求めて離郷したのだから、いい年をして郷愁もないものだ。しかし老人にだって甘ったれ心理はある。そこに生涯の最終の甘え——生の郷愁というべきものがある。風土に即していえば「風色の望郷」といったところだ。

戦後に前橋市域に合併（昭和二十九年四月）したけれども、それ以前は群馬県群馬郡元総社村だった

私の村は利根川の西側にあり、大字元総社、石倉、大友、大渡の四つで成っていた。大字石倉の中央部は、前橋市街の延長ほどにも商店が軒を並べていた。

私の生まれそだった大字元総社は本村と呼ばれ、前橋市街の中心部から、利根川をへだてて西へおよそ四キロである。私の少青年時は養蚕農家が圧倒的に多く、繭に次ぐ農産物は米、麦だった。養蚕の夏になると前橋へ行く道は桑畑のあいだに埋もれ、田植え時は道に水流があふれた。

村の東寄りに県社総社神社がある。やや北西部寄りに上野国府跡がある。神社の斜め裏手に天台宗の寺、斜め前方にも天台宗の寺、ずっと南に曹洞宗の寺。数カ所の墓地。祠や、願かけの小形石仏がたくさんあるところ。これらが村の古代や信仰や習俗やの遺物である。

中世に蒼海城という城があった名残だろうか、村は畑地、たんぼを除いた住居地域が赤石町、朝日町、新田町、馬場町、金井町、下宿町、中宿町、上宿町、殿小路町、粟島町、阿弥陀寺町、内藤分町、前内出町（部分的呼称の笠町というのもあった）と、小字名が付いて十余に区分されている。このうち下宿、中宿、上宿はほんの少し町並みめいていて、昔の小学校国語読本風に紹介すると、その一部分が、「三角辻の角店はいちばん高級菓子屋です。菓子屋の隣は亀さんです。亀さんの隣は梨屋です。亀さん、梨屋は駄菓子と小物雑貨の店です。梨屋の隣は百姓家です。百姓家の隣は初店です。初店は酒を売っています。時どき酔っぱらいの声がします。この五軒の反対側は往還をへだててお明神さまです。お明神さまは総社神社です」

となる。私が満五歳だった明治四十四年（一九一一）の本村戸数四百三。人口二千二百。それから大正年代にかけての農家でない家は医師一戸、蚕種製造一、二戸、鍛冶屋一戸、桶屋一戸、大工二戸、水

車五台、造り酒屋一戸、酒のある店二戸、葉茶屋一戸、豆腐屋一戸、理髮店一戸、運送屋二戸、自転車屋一戸、大きい雜貨店二戸、小さい雜貨・駄菓子屋四、五戸。髪結い一人、産婆一人、団子屋一戸、人力車三台。社内屋と呼ばれる神社境内の茶店二戸。画家一人、そのほかの何々である。

ざっと数えるところだが、私の家の通称は西ん家^ち。私は西んちの信ちゃんだ。村ことばで言う、俺家は西んち、おらあ西んちの子だい。田畑三十六町歩くらいの富農の本家がおなじ金井町の東端。田畑六町歩くらいの新宅^{ぶんば}（分家）の私の家が西端。それで西んちと呼ばれた。伊藤家の新宅は馬場町にもう一戸あって、この方は馬場^{ばんば}んちである。

馬場町から新田町への往還の辻。そのあたりは泥鰌^{どじょう}漁り、水浴び（水泳）の行き帰りに、夏の毎日を裸足であそびまわったところだ。十年ほど前の春先に村へ帰ったとき、その辻で、一瞬、私は棒立ちになった。棒立ちの棒を、ノドに突っこまれたほどにびっくりした。

何と、とつぜんゴー・ストップの信号に出っくわしたのである。私の知らぬ間に設置されたその交通信号機が、この村生まれの私の「へ入村」を押し止どめるかのように、音もなく赤になった。呆^{あへ}気にとられてあたりを見まわすと、耕運機に乗った青年がひとりいた。

信号機設置は村の革命だ。村の生態とその歴史を「昔」と「今」とに境界づける変革だ。おおげさなことを言うな。おおげさもへちまもない。赤信号に驚^{おどろ}かされ、青信号におろおろしたんだ。へ私の村」とへ変貌した村。足踏みしていると、耕運機の青年がゆっくりと南へわたっていった。

そこを南下すれば間もなく左手に寺。右手に墓地。さらに南下すれば道は桑原をくぐり、たった一

戸だけの水車小屋。間近い地点の国鉄両毛線の線路。その両側の水田地帯。陽炎のもえる線路^{せんろ}路をたどってレールに耳をあて、遠く走る列車のカンカンとひびく音をきいた幼い日。だが、その南下する道は桑原もろとも消えてしまった。

信号機のところへ戻り、北へ行けば総社神社の青銅の大鳥居。そこからが村の中心部だ。

村から隣村・隣接地へ通じる道は東西南北の四本のほかに、副道といったような道が何本かあった。副道はせまくて貧弱だ。村では荷車がいちばん大きい運搬車だったから、幅ひろい道なぞ要らなかったのである。そして都会地の街裏にほそい露地があるのに似て、村にも竹藪や桑畑、草むらに紛れこむようにして、副道よりもっと細い道があった。

自分家^{うち}の庭から、門道^{かど}を通して往還へ出る。

道と往還はどうちがう？

字面^{じづ}の意味はおなじだろうが、私の幼年の場として両者^{りやう}はどこかが違っていた。往還は幅がひろく乾いていて、人通りの少ないときでもにぎわいがある。道は細く湿^{しめ}っていてさびしい。

竹垣のある裏道をひっそりと歩く。私のほかに通る人はない。竹垣の角^{かど}を曲がろうとする。あ、そこを誰かが曲がった。人影はないけれども、誰かが掠^{かす}めていった。

風？ それとも風の像^{かたち}。

自然の横道、村の裏道を、声なく影なく漂うもの。おさない日に、私はいくたびか角^{かど}を横切るものの気配を感じた。

そういう村の半農ふう環境に生まれた私は、養蚕、稲作農家の労働と生活を五分の一くらい実地に

経験し、他の五分の三くらいを傍から見、残り五分の一くらいを〈農〉の感覚でさまざまに吸収した。そういう私の年齢の底にかさなっている俚諺や習俗による情感の年代誌……。

前橋と合併してすでに三十年。ゴー・ストップ革命の村の専業農家は数戸止まりだ。二十三歳で村を離れ、いったん帰郷して数年を過ごし、三十一歳の秋から宇都宮、東京、横浜へと転々した私が、ゴー・ストップのこちら側と向こう側とを往ったり来たりする。ふたたび還らぬものとの往来である。

*大字元総社、石倉、大友、大渡を合わせた全村人口（『前橋市史』その他による）

大正 九年	四千四百二十八人
大正十一年	四千五百五十五人
昭和 五年	六千 四十四人
昭和二十年	六千八百四十三人
昭和五十五年	一万六千四十九人

風々吹くな西の山が燃えるぞ

1月

前橋市南郊の群馬県農事試験場に、八枚翼をひろげて、オランダ風（製作はドイツ）といわれた一基の風車が浮かんでいた。脱穀、精米、製粉など風力エネルギーの利用だ。六十年ほどとも遠い空の眺望を、幻のように私はおぼえている。

明治・大正・昭和（戦前）を通じて上州は養蚕、製糸、絹織物がさかんで、市内の流れに撚糸の動力利用の水車がまわっていた。水車は県内の伊勢崎、桐生の機業地にもまわっていた。だが風車はなかった。農事試験場に設置したのが、はじめての試し風車だった。

オランダ風とは何だろう。私の手もとにある本場オランダの風車写真はどれも四枚翼である。もしも四枚翼が基本形態だとすれば、八枚翼は本場と様式がちがうわけだ。そうだ、オランダ風というのは、一つにはエキゾチックな新奇さということなのだ。風をつかまえる中空の工学意匠。私はそういう物めずらしさでそれを遠望した。

電線が唸りをあげる。こまかい砂礫が頬つぺたに当たる。手拭で頬冠ぶりした人が田んぼ道でよじける（よろける）。乾き切った空つ風。風当たりのひどい村の家々には、屋敷の西・北面に、防風のための竹藪が櫓ぐねがある。

竹藪はたけやぶ。竹林などという変ちくりんな呼び方はしない。烈風の日には竹藪ぜんたいが騒々しい音をしてうねり、振じれ、渦巻き、波浪のように起き伏しする。櫓ぐねは青竹をしつかりと結びつけた櫓の垣根。母屋に等しい高さの防風設備である。垣根の上州語はくね、古語だ。それを櫓ぐねと発音する。

吹きまくられるばかりで、ひたすらに避けてきた風。それを逆に、とつ掴まえてやろうとした風車。八枚翼はよりよく風を受けようとする効率的設計だが、あの風車はどれほどの馬力を生み出したか。

終日さいわいだ風が晩方ばかりとやむ。晩方はおろか終夜、夜通し吹きやまぬことだってあるが、たしいがいは晩方になるとやむ。なぜ？ 風だつてくたびれるからさ。ランプの下の方。六、七十年前のおさない思い出の夜。その夜はお客があつた。

風とお客は夜とまる

晩方・夜になると止まる風と、隣村やそのまた隣村あたりから来て泊まるお客とを掛けた俚諺だが、おさない子は、これくらいの掛けことばもたやすくは解けない。それが解けたとき一つの知恵が実をむすぶ。

村に何台か自転車走ようになったのは、たぶん大正年代になってのことだが、その台数増加は実にのろのろだった。自転車以前はもちろん、自転車が入ってから、お客はたいがい歩いて来た。四、五歳の子供も母親の手にすがって歩いた。

「まあすこしだ。がまんしてエブ（歩く）んだ」

誰にも背負われず、自分の足であるいて、はじめて母の実家へいった日の遠い遠い道のり。歩くことを嫌がらなかった昔の脚。私の脚も、そういう昔をあるいた脚である。

はやい冬の日の暮れ。暮ればまっくら村道、畑道。暗い道はイブセエ（危ない）。農閑期ということもあって、冬うちは時たまお客がとまった。隣村の話、そのまた隣村の話は、子供にとつて知らない国のあれこれを聴くことだ。昔の人たちの交際（つきあい）に温（ぬく）み、厚みがあったのは、互いの宿りや、灯下の語らいが積みかさなっていたからである。

風々 吹くな 西の山が燃えるぞ

晩方うたった叫び唄。吹きやんだ後の西空の透明な凍（こ）み色。夕焼けが火のようだ。天上（てんじやう）の火事。自然の戦慄的感銘は極地、極点だけのことでなく、幼年のころは、夕焼けにさえ畏怖にも似た身ぶるいをおぼえた。

風々 山へ行つて 鬼の飯（めし）を食って来い

これはどんな意味だったのか、私には分からない。丘陵や山へ突きあたれば、おのずと風勢がおと

ろえる。風よ、ちつとは落ちつけ。それで山へ行けとけしかけたのか。そんな想像をしてみる。以前は森や林をも山と言ったから、平地の村の子供でもこういう唄をうたった。

ここに挙げた〈風唄〉二つは、普通にいうわらべ唄とはちがう。私は「ここはどここの細道じゃ、天神さまの細道じゃ、ちよつと通してくだしやんせ」という唄を、村の幼少年時にきいたおぼえがない。私の幼年情緒において「天神さまの細道」は町の風俗唄、町の女の子の遊戯唄にきこえる。風の中で私たちが発した切れ断れの声。わらべ言葉。あれがわらべ唄の原質なんだ。もとよりこれは我流〈唄論〉に過ぎないが……。

ひび、あかぎれが痛むときは風

一月、二月の風は肌を突き刺す。この俚諺は痛みによる風の予知だが、私は風の日はもとより、来る冬ごとに両耳の霜焼けになやまされた。痛かゆく、爛れ、かさぶたになる。

踵をアクツという。アクツに大きく口をあけるあかぎれ。ひどくなるとその口から赤く肉が見える。貝殻に詰めた、竹の皮に包んだ固形の黒い薬を取り出し、それを焼け火箸で溶かして泥状にし、あかぎれに流しこんでくれた母の荒れた手。熱くて痛い、それでいて気持ちがい。農家の子の冬はあかぎれが絶えない。手のひびなんぞ当たり前のこと。女衆の手だってひび荒れていた。

俚諺や叫び唄がこんなふうにあったのに、風の性質や状態をあらわす言葉はひどく少ない。空いっぱいには騒ぐ空っ風。吹き寄せる大波小波の赤城おろし、榛名おろし、浅間風。南風のシタケ。ツナミ。

私が知っているのはこの程度だ。ひどく少ない。そうはいっても風の土地だ。生^{なま}なかの風ことばをつくったところで、そんなのは、あつという間に吹^ふつ飛ばされてしまう。

背がひくく痩せ形で貧相だから、いかにしても私は「肩で風を切る」ことが出来ない。そんな真似をすれば、途端にひっくり返ってしまう。わかい日には、せめてものことに風に身をさらし、しかも面をし、黒い吊り鐘マントをばたばたさせ、吹^ふつ飛ばされた帽子を追いかけた。

風に押され、押し返し、風上^{かまかみ}へむかつてあるく。そうして風に呼吸^{いき}を詰^{しめ}まらせ、野っ原で、河のほとりで、町通りで、どれほど風の日の思いをバタつかせたか。風に抗^{よぶ}らつてあるくのが好きだ。少青年時に聴いた風の声は、もう既往^{とく}に消えてしまったが……。

吹きつさらしの野面。桑原の土煙。飢えてカラスがいる。その荒涼風景が、不思議なことに絵画的にさえ見えたのが、村の東南端にある新前橋駅だ。上越線と両毛線の分岐点に当たるこの駅は田んぼの中の小駅で、さえぎるもののない空^{そら}つ風がぶち当たる。その風の強さが全国の国鉄駅で九番目だ、と誰かが私におしえた。何を根拠^{こた}の九番目か怪しいもんだが、上州烈風地帯の小駅だったことに誤りはない。

前橋近辺の風はどれほどの強さか。次に前橋気象台の記録（昭和五十七～五十八年）を紹介する。これくらいの風は全国各地に吹くだろう。それでも私の風土感覚において上州は「風の土地」だ。風速一〇メートル以上の日数が年間九十九日、それが一月～三月の間は一日おきの割合で吹いている。

月	平均風速	平均最大風速	瞬間最大風速
十一月	二・八m	一一・六m	二二・三m